

博士学位論文審査要旨

2008年6月30日

論文題目： 現代日本語における外来語増加の S-curve モデル
——大正から平成までの社説の通時的調査を通して——

学位申請者： 橋本 和佳

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 石井 久雄

副査： 文学研究科 教授 田中 励儀

副査： 文学研究科 教授 藤井 俊博

要 旨：

この論文は、現代日本語における外来語の増加の様相がロジスティック曲線 (S-curve; logistic curve) に回帰することを立証したものである。

自然面でも社会面でも、極めて多くの時系列現象がロジスティック曲線に回帰することが、現在、知られている。言語面でも同様の現象が存在すると推測されてきた。しかし、言語については、ある程度の期間にわたって等質の条件下で生じ続ける現象というものが設定し難く、そのために、実証的に検討されることは稀である。

著者は、現代日本語における外来語の諸相について研究を進め、多数の実証的結果を公表してきた。その研究のうちから、特に等質と見てよい条件下の時系列現象を取り上げ、得られた結果をモデル化して、この論文をまとめている。等質の条件というのは朝日新聞社説であり、期間は1911年から2005年にわたって、その間の等間隔抽出標本（抽出比約1/30）1140日分・社説数1768件をデータとした。延べ20824語である。固有人名・地名や数量単位は、外来語であっても使用量増加として一般に話題になることはなく、批判的に取り上げられるのは普通名詞であり、その量は異なり1191語・延べ7227語である。

1911年—2005年の朝日新聞社説に現れた外来語普通名詞は、1950年代後半から1970年代前半にかけて急増し、その前後は微増にとどまる。つまり百年近くにわたって増加し続けはしたが、直線的に単調なのではなく、S字形 (S-shaped distribution) を描く。この論文はそのことを具体的に実証し、また、同様の様相が、社説のうちでも内容で中心になる政治経済を論じたものについても、広範囲・高頻度に現れる語彙に限っても、見られると指摘する。さらに、1932—2002年の読売新聞社説（抽出比約1/150）についても検討して、同様にS字形で増加するという結果を得ている。

当のS字形はロジスティック曲線に回帰する、ということの立証がこの論文の眼目である。朝日新聞社説の全体の場合には、年次の順序 t (1911年が1, 欠損値を除いて2005年が91) に対して、1万字当たり出現外来語数 w が

$$w = 83.26 / (1 + \exp(3.6423 - 0.0491t)) \quad \text{決定係数} 0.8310$$

として表される。政治経済関係社説の場合でも、読売新聞社説の場合でも、同様に回帰しそうであること、つまりフラクタル性がある可能性を、筆者は述べ添えている。

ここで、 w が、一定語数にでなく一定字数に占める量として設定されていることは、問題を残すところである。語数と字数とに強い相関があることは経験的・感覚的に信じら

れ、著者もこの論文の中で立ち入って検討したところがあるが、なお立証不十分である。この論文にとっては処理対象そのものであるので、著者による今後の解明を期待する。

著者は、もともと、ロジスティック曲線回帰を求めて言語現象を漁ってきたのではない。言わば偶然に、まことに好都合の対象が目の前に現れたのである。それを見逃さず、蓄えてきた実証的材料を基礎として理論的研究に進みえたことは、著者の日ごろの精進の賜である。この論文の学術的価値は大きく、これをもって著者に博士（国文学）（同志社大学）の学位を授与することは妥当であると判断する。

総合試験結果の要旨

2008年6月30日

論文題目： 現代日本語における外来語増加の S-curve モデル
——大正から平成までの社説の通時的調査を通して——

学位申請者： 橋本 和佳

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 石井 久雄

副査： 文学研究科 教授 田中 励儀

副査： 文学研究科 教授 藤井 俊博

要 旨：

2008年6月13日（金）午後5時00分から2時間30分にわたって、徳照館1階会議室で、総合試験を行った。

冒頭に語学試験を行い、言語学・統計学の専門用語を含む英語について、著者が堪能であることを確認した。専門分野に関する試験は、学位申請論文の記述についての質疑応答を中心に、関係する日本語学・言語学・統計学などについても広く行った。著者は、終始明確に応答し、十分な学力を具えていることを示した。

以上により、総合試験の結果は合格であると判定する。

博士學位論文要旨

論文題目： 現代日本語における外来語増加の S-curve モデル
—大正から平成までの社説の通時的調査を通して—

氏名： 橋本 和佳

要旨：

本論は、大正以降の社説を用いた通時的調査を行い、外来語がどのように増加してきたか、という量的推移について考察することで、その増加過程が「S字カーブ」のパターンを描くことを指摘し、計量的手法により「外来語増加の S-curve モデル」を提示するものである。

現在では、おびただしい量の外来語が使用されているが、外来語の本格的な増加が始まったのは大正時代であるという。すなわち、外来語は大正から現在にいたるまでの約一世紀の間に大きく増加したのであるが、その増加過程について、実際のデータを提示した研究はほとんど行われていない。また、外来語の増加過程がどのようなパターンを描くか、という一般化もなされていない。そこで、本論では、大正以降の社説の通時的調査を行うことで、外来語の増加過程を明らかにし、そのモデルを示すことを目的とする。

日本語における借用語は、その出自によって漢語と外来語とに分類されるが、漢語の歴史は外来語とは比較にならないほど長い。それゆえ、外来語は、和語と漢語が共存する日本語の世界に、室町時代末期に新しくやってきた「新参者」であるといえる。では、外来語という「新しい」語種が普及していく過程とは、どのような姿・形をしているのであろうか。本論では、大正以降の社説における外来語が S 字カーブを描いて増加してきたことを述べ、「Logistic 曲線 (ロジスティック曲線)」を用いて計量的分析を行う。なお、S 字カーブは様々な成長・普及過程に共通して見られる典型的なパターンであり、Logistic 曲線は最も一般的に用いられる理論的成長曲線である。

本研究は、外来語の増加・普及過程が S 字カーブを描く、という新たな枠組みを提示するものであり、日本語における漢語や他言語における借用語のモデルだけでなく、増加現象一般のモデルを構築するための基盤的研究として位置づけられる。

本論は、全体で 10 章から成る。本論の構成は次の通りである。大きく分ければ、第 8 章までが記述的研究であり、第 9 章が理論的研究である。記述的研究では、第 2 章から第 7 章までは朝日新聞を取りあげ、第 2 章では資料の性格、第 3 章から第 6 章までは外来語の語彙、第 7 章では外来語の表記の問題について、それぞれ論じる。第 8 章では、読売新聞を取りあげ、2 つの新聞を対比する。

以下に各章の要点について、順を追って記す。

第 1 章では、これまでの外来語に関する研究、および日本語の語彙一般の歴史的推移に関する計量的研究を概観し、研究史を整理する。これまでの研究は、外来語に限らず、ある語がいつから使われたか、どのように意味が変化したか、といった語誌的なものが中心であった。このような状況に照らして、本研究は、上に述べたような問題を設定する。

第 2 章では、朝日新聞社説の資料性とその変遷を述べる。本論では、1911 年から 2005 年までの朝日新聞について、各年 12 日分、合計 1140 日分の社説 (1768 社説) に現れた外来語を対象とする通時的調査を行う。なお、社説を調査対象としたのは、外来語が頻繁に使われる分野よりは、

抑制された分野でも増加しているという実態をとらえようとしたからである。

第3章では、調査単位等の調査方法を解説し、得られた外来語の基礎データを提示する。外来語の延べ語数は20,824語であり、固有名詞が58.7%、普通名詞が34.7%、数量名詞が6.6%を占める。「出現率」（一万字あたりの外来語の出現数）の年代別推移は、普通名詞のみが増加傾向にあった。また、高頻度語彙の推移パターンには、特定の年代に突出して多いもの、増加傾向にあるもの、一定の傾向が見出せないものの3種が見られる。外来語の出自については、英語出自の語が増加傾向にあり、現在では9割以上を占めることを指摘する。

第4章では、普通名詞の増加について考察を深める。普通名詞の推移には、「はじめはゆっくりと増加し、半ばで大きく増加し、再び緩やかな増加に転じる」というパターンが見られる。いわゆるS字カーブである。このパターンは、これまで明確に認識されてこなかったが、先行研究の調査結果を検討すると、広く観察されるものである。

なお、外来語が急増する1960年代には、外来語は新奇な存在として好んで使用されたが、一方でその氾濫に対する批判も強くなっていく。外来語が増加から停滞に転じる1970年代半ばは、外来語の使用が「知識層の特権」ではなく、「文化の後進性」を示すという考え方が生じるターニングポイントである。その後、1980年代にはまた増加し、1990年代には停滞する。1990年代以降には、公的機関が「外来語の氾濫」に言及するなど、外来語を取り巻く環境は厳しさを増す。このような社会背景と外来語の増加とは関連しているものと考えられる。

第5章では、社説を「政経」（「国内政治」、「国際政治」、「経済」）と「その他」にジャンル分類し、高頻度語彙や、出現率とその推移が、ジャンルによって異なることを明らかにする。出現率の値は、「その他」が「政経」の約2倍であり、「政経」内部では、「経済」で高く、「国内」「国際」で低かった。また、出現率の推移は、「その他」では1950年代後半からの10年間と1980年代後半の短期間に大きく増加するが、「政経」（および「国内」「国際」「経済」）では1950年代後半から大きく増加し、1970年代後半以降は停滞するというS字カーブを描く。

第6章、第7章では、外来語の増加にともなう関連現象について、個別的な問題を扱う。第6章では、10以上の社説に出現する102語を「広範囲語彙」とし、その特徴について論じる。広範囲語彙には、社説の話題そのものを示す「時事用語」と、説明や論述の際に多用される「論説用語」とが見られる。前者には政治経済に関する語が多く、後者には一般に定着した抽象語が多い。また、広範囲語彙のうち、増加傾向にあるものが大半を占め、減少傾向にあるものはごくわずかであることから、「語レベル」での増加が「語彙レベル」での増加を生み出しているという見解を示す。

第7章では、得られた外来語の表記について考察する。複数の表記法の見られる語54語には、長音をどう表記するか、漢字で書くかカタカナで書くか、という表記のゆれが多く観察される。漢字、カタカナ、ひらがな、ローマ字という表記法の推移については、カタカナ表記が大部分を占めること、漢字表記は1910年代には過半数を占めるが、それ以降減少すること、ひらがな表記はほとんど見られないこと、ローマ字表記は戦後出現し、増加傾向にあることを指摘する。

第8章では、読売新聞社説における外来語の特徴と量的推移を明らかにする。読売調査では、1932年から2002年まで、5年ごとに合計15年分、180日分のデータを採取する。はじめに、得られた外来語の語数や高頻度語彙等の基礎データを提示する。考察においては、朝日新聞との比較を行うことで、社説の外来語について一般化を試みる。語彙の特徴については、両紙ともに、1970年代以降、各年において複数の社説に出現する「定番化」した抽象語が増える。量的推移については、読売新聞は、1970年代後半以降は朝日新聞よりも外来語を多く使用するが、その増加パターンは、朝日新聞と同じく「はじめはゆっくり、半ばで急激に、最終段階で再び緩やかに」というS字カーブを描く。

第9章では、以上の記述的研究を基礎として、理論的研究に進む。すなわち、朝日新聞、読売新聞に共通して見られたS字カーブの増加パターンについて、計量的手法を用いて理論化を試み

る。Logistic 曲線あてはめの結果、朝日新聞（全体、および「政経」）、読売新聞のいずれのデータにも曲線がよくフィットした。したがって、「大正以降の社説における外来語の増加過程は Logistic 曲線で表わせる」ととらえられる。さらに、外来語の増加過程は、国会演説など社説以外の資料にも共通して S 字カーブを描く、という「外来語増加の S-curve モデル」を提示する。

また、言語学の S-curve モデルの研究史にてらして、本研究の位置づけを確認する。言語変化の S-curve モデルについては、国内外で研究が始まったところである。本研究は、はじめて、日本語における外来語の増加過程について計量的分析を行い、S 字カーブの全体像を提示した。

第 10 章では、各章の要旨を確認するとともに、本研究の意義と今後の展望を述べる。

本研究の意義は、次の 2 点にまとめられる。

1 つめは、一般に大正以降に始まったとされる外来語の増加について、通時的調査から得られたデータを提示し、増加過程を詳細に記述した点にある。本論は、社説という限られた資料についてではあるが、外来語が「どのように増加してきたか」という問いに対する一つの答えを提示した。

2 つめは、データの推移を記述するだけでなく、外来語の増加を言語変化の一種としてとらえることで、理論化に進んだ点にある。本論は、万物の成長過程を示す理論的曲線が、実際に得られた外来語の時系列データによくあてはまることを実証した。

本論では、外来語の増加過程の基盤を明らかにした。しかしながら、本研究には多くの課題が残されている。S-curve モデルについては、現時点では仮説を提示した段階に過ぎない。外来語の通時的な変化について一般化するためには、今後、様々な資料の通時的調査を蓄積し、それぞれの増加パターンを記述し、資料間の共通点と相違点を探っていく必要がある。また、S-curve モデルが借用語や増加現象一般にどの程度通用するか、といったモデルの適用可能性についても研究を進めたいと考える。